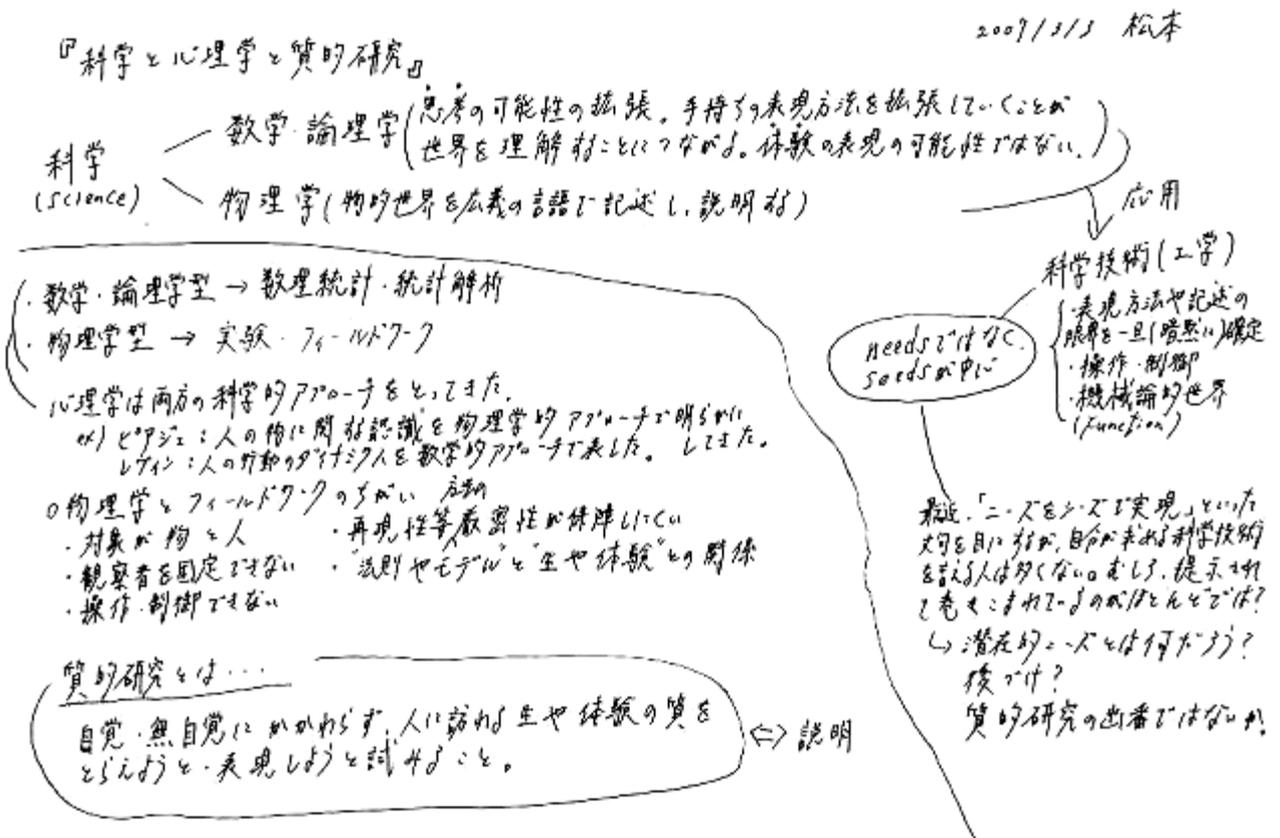


導入「科学における質的研究」

松本 光太郎

(名古屋大学 エコトピア科学研究所)

はじめに、今日この研究会を主催するにあたって、私なりに質的研究は科学コミュニティのなかでどの位置にあるのか書いてみました。悪筆で申し訳ないのですが、ちょっとたどっていきます。



これはあくまでも一つの見解です。いろいろご意見いただきたいと思います。

質的研究では、これまでにはなかった/少なかった議論を興そうと企てるわりには、論

争が起こっていないし、検討されていないことが多すぎはしないかと感じています。検討のなされていないことの1つが「科学」という枠組みです。

最近、新たな科学的というか、マニュアルというか、例えば「グランデッドセオリーアプローチ」のような定式が出てきています。

「質」なんてとらえ難いようなことを言い出したのだから、崖っぷちの状況がたぶんずっと続いていき、きわどい、疑似科学と明確な線引きは出来ない(と私思っています)。

マニュアル化に救いを求めるのではなく、分かった気になるのではなく、つかみきれない宙ぶらりんの感じを、ある時は苦しみもがきながら、ある時は苦しみを快感にして、ある時はタフにこらえつつ研究や議論を続けることが大事ではないでしょうか。

今日の研究会は、「科学」というキーワードを中心に据えています。私自身、以前紀要論文を書いた際、査読のコメントとして、「科学的で評価できません」といった文言が書かれていた経験があります。そのコメントを書かれた先生は、心理学界の中で名の通っている方ですし、優秀な方だと思います。

科学という言葉に我々は正誤の審判を仰ぐ気持ちを抱いたり、近未来的な冷ややかなイメージをもっていたり、その言葉に反発したり身を委ねたりします。実に大きな力を持つ言葉です。

「心理学は科学である」と学部時代に言われたことのある人は多いのではないかと思います。その心理学内部から、質的研究と呼ばれる分野が出てきたのですが、踏み絵のように質的研究は科学なのかと問われることがしばしばのように思いますし、現状その問いかけに明確に答えていないため、流以下の学問だと見なされているのではないのでしょうか。

登壇者紹介

そのような現状のなかで、質的研究と科学との関係を思索している蛮勇の持ち主が、今日話題提供をしていただくお二人です。

まず村上さんですが、「ツキ」や「運」というテーマについて研究を続けてきています。運がつくとか、ゲンを担ぐとか、そういった我々の生活のなかにある不思議な事象に注目してきました。ただ、村上さんの研究の難しいところは、どうも怪しく見られてしまう。いわゆる疑似科学の範疇に見られてしまう。しかし、ツキや運といったことは、私たちの生活のなかでよく顔を出します。つまり、私たちの生活に潜んでいる心性を表しているの

ではなかろうか。テーマが怪しく受け取られるが故に、方法も怪しいと査読論文に載らなくなる。怪しく見られるテーマだからこそのオーソライズされた科学的方法の選択、といったお話も聞けると思います。

次に荒川さんですが、荒川さんは人のジェスチャーに関する研究や心理学史など様々な研究をなされています。そのなかで、知の社会的受容というか、社会における知の役割のようなものに関心を持たれているように思います。その知ということを考える上で、否が応でも考えなければならないのが、科学という枠組みなわけです。荒川さんは、心理学の歴史と現在の社会における認識、それから学術における暗黙のルール・思い込みなどを議論の俎上に上げながら、心理学と科学、質的研究と科学といった話をしていただけないかと思います。

コメンテーターは、伊勢田さんとサトウさんをお願いをしています。両先生はすでによく知られていますので、私をご紹介するまでもないと思います。伊勢田さんは、科学の哲学、科学社会学などをご専門して、世の中に流布している具体的な科学的知とされるものについて丁寧に考究されています。サトウさんは、性格、血液型、知能指数、それから都市伝説なんかもやっていたますが、怪しげな知に関する研究が多数あります。それから、心理学の歴史に関する研究も行っています。

早足ではありますが、このような登壇者を中心に議論を進めていきたいと思います。

